

Title	社會秩序の論理
Sub Title	
Author	新館, 正國(Niidate, Masakuni)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1942
Jtitle	哲學 No.24 (1942. 12) ,p.67- 92
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000024-0067">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000024-0067</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 社會秩序の論理

新館正國

はしがき

社會秩序は、社會に於て人間の間に實現される意味的な關係である。何故なれば、すべて秩序は「一つの全體に於ける個別者間の意味的な關係」<sup>(二)</sup>に他ならないからである。秩序はすべて、一つの全體に在り、且つそこに在る個別者の間に實現されるのであつて、一つの全體に在らざる秩序は、量を失つた物體に等しく、またそこに在る個別者に由つて支持されてゐない秩序は、動かざる運動に等しい。社會に於て人間に由つて支持されてゐない社會秩序は、空虚な概念に過ぎないであらう。

従つて現實的な社會秩序は、その構造の本質的な契機に基いて、次の二つの様態に區別され得る——

- (一) 一つの全體としての社會が、そこに在る凡ゆる個別者としての人間の間に實現する意味的な關係。
- (二) 若干の個別者としての人間が、彼等の在る一つの全體としての社會に實現する意味的な關係。

前者が全體的な社會秩序と呼ばれ得るならば、後者は特殊的な社會秩序と名付けられ得るであらう。何故なれば——一面に於ては、前者の主體が一つの全體としての社會であるのに對して、後者のそれは若干の個別者としての人間であるからであり——他面に於ては、一つの全體としての社會に在る凡ゆる個別者としての人間の間に、前者が全體的に實現される意味的な關係であるのに對して、後者は特殊的に實現されるそれであるからである。併し全體的な社會秩序と特殊な社會秩序とは、單に斯かる構造に於て異つて居るばかりではない。それらの意味内容に於ても亦、前著者が社會そのものの習慣的な秩序であるのに對して、後者は社會に加へられる規範的な秩序である。ガイガアは、社會の習慣的な秩序を以て、社會生活の「過去から成長したもの」と云ひ、また社會の規範的秩序を以て、「未來の爲の基準を打ち立てるもの」<sup>(1)</sup>とも云つてゐる。

社會秩序の論理は、これら二様の社會秩序が如何なる存在關係に立つかを究明せんとするものである。斯かる論理の研究が、一つの全體としての社會と個別者としての人間の意味及び相互の關係を軸心として展開せらるべきことは云ふまでもあるまい。蓋しこの兩者は、全體的、特殊的のいづれを問はず、すべての社會秩序の「極性」(Polarität)をなすものであり、社會秩序は、謂ばこの兩極の間に散りひろがる意味關係的な存在の火花に他ならないからである。

却説、社會秩序の二つの本質的な様態をみると、そこに先づわれわれの注目を惹く事實は、全體的な社會秩序と特殊的な社會秩序とに於て、主體と實現の場が異つて居り、而かもそれらが全く對立的な關係に在ることであらう。即ちそこでは、一方の主體は他方の實現の場となり、また一方の實現の場は他方の主體となつてゐて、一つの全體としての社會も個別者としての人間も、共に一方に於ては秩序の主體であると同時に、他方に於ては秩序の實現の場となつてゐるのである。この事實の奥底には、如何なる事實關聯がかくされてゐるであらうか。

人間は、彼等の社會的行爲に於て、或是一體的、或は上下的、更に或は對立的な關係に立つて、夫々獨自の社會生活を繰りひろげてゐる。社會生活は、彼等に由つて直接には社會過程として體驗されてゐるのである。社會秩序も、それが社會生活上の一つの事實である限り、固よりその例外をなすものではない。即ち社會秩序も亦、われわれにとつて直接には、各自の社會的行爲に於て、或是一體的な關係としては、或は上下的關係として、更に或は對立的な關係として體驗されるのである。

然るに本來、行爲する人間即ち行爲の主體としての人間は、個別者としての人間である。何故なれば、人間は、それ自身に於ては唯だひとりであり、彼の行爲に於てのみ、多數に於けるひとり即ち個別者で在り得るからである。個は單なる一ではない。多に於ける一である。個として別けられる人間は、決して單なる孤獨者ではなく、多數の孤獨

者と共に在る孤獨者である。従つて彼の行爲は、全き多のそれであることも出来なければ、また全き一のそれであることも出来ない。彼の行爲に就て、或は社會的行爲と云はれ、或は個人的行爲と云はれてゐるものは、いづれも多に於ける一の行爲であつて、それらの差違は、唯だそれぞれの行爲内容にとつて多が直接的な決定要因となつてゐるか、或は一がそれになつてゐるかの程度の上に認められ得るに過ぎない。従つて社會的行爲にとつて、個人的行爲は、何等次元を異にした異種の行爲ではなくして、間接的な社會的行爲であり、個人的行爲にとつて社會的行爲も亦、同様に間接的な個人的行爲に他ならないのである。

では、行爲の内容を、決定する多とは何か。

個別者としての人間が、いま指摘したやうに、「多數の孤獨者と共に在る孤獨者」であるとすれば、彼の行爲の内容を決定する多は、彼自身も亦そこに在る「多數の孤獨者の共在」以外には在り得ない。即ち彼自身も亦そこに在る「多數の孤獨者の共在」が、彼の行爲の内容を直接的に決定するとき、そこに彼の社會的行爲は出現するのである。

併し多數の孤獨者の共在は、決して單なる多數の孤獨者の總和と同一のものではない。何故なれば、すべて孤獨者は、いづれもそれ自身に於て他と共に在るのではなく、その行爲に於てのみ他と共に在るからである。人間は、その生死に於て、常に唯だひとりである。われわれは、他人の生活を生活することは出來ず、また他人の死を死ぬことも出來ない。即ちわれわれは、他人と生死を共にすることは出來るが、他人と生死を一にするることは出來ない。斯かる生死の主體としての人間が、孤獨者としての人間であり、彼はその生涯を通じて、意識的たると無意識的たるとを問はず、

常に生死の關頭に立つて、ひとりに生きるのである。彼から他人への通路は、彼の行爲を措いては他に無い。即ち彼はその生死の一歩一歩に於て絶えず彼自身の決意を迫られ、且つその決意に由つて自分自身を生かすこと殺すことも出来る。生死の可能性に直面する。併し自分自身を或は生かし或は殺す——その行爲に於ては、彼は決してひとりでは在り得ない。他人とつながるのである。最も孤獨な死を死んで逝つたと考へられる自殺者と雖も、猶ほその自然の行爲に於ては、自殺の場所に於て、また自然の環境に於て、或は未知の人々と、或は妻子友人とのつながりを持つであらう。従つて多數の孤獨者の共在とは、彼等の單なる共在ではなくして、彼等の行爲に於ける共在でなくてはならない。斯かる共在は、「壁が煉瓦から出來てゐるのとは違つて、宛かもメロディが音から出て來るやうに、謂はば（行爲する）人間から出來る譜音である。<sup>(三)</sup>」

併し更に一步を進めてみれば、多數の孤獨者の行爲そのものは、それぞれに現實的には獨自の異質的な連續をなすものである。即ち現實的には彼等に於て同一の行爲は全く在り得ない。従つて彼等は、その行爲に於て、他とつながりながら、他と異つてゐるのである。斯かる行爲に於ける彼等の共在は、一定の行爲の形式の下に立つことなくしては、不可能であらう。何故なれば、互ひに全く異つた行爲をつなぐものは、固より行爲そのものでは在り得ず、行爲の何等かの統一的な規定でなくてはならないからである。多數の孤獨者は、一定の行爲の形式の下に立つ彼等の行爲に於ては互ひにつながり合ひながら、それぞれの行爲そのものに於ては互ひに全く他とは異つてゐるのである。従つて此處に行爲の形式といふのは、固より一々の孤獨者のそれではなくして、多數の孤獨者のそれであり、多様に異質

的な行為を展開する多數の孤獨者のつながりを現實的に可能ならしめる基體である。孤獨者がその行為に於て他とつながるところのは、決して單なる行為そのものに由つて直接に他とながるのではない。斯くの如き基體に媒介されて、彼の行為そのものは初めて他とながるのである。多數の孤獨者の行為に於ける共在とは、一定の行為の形式の下に立つ彼等の行為の共在に他ならないのである。

然るに多數の孤獨者の現實的な行為の形式には、その統一性に二つの意味が區別され得るであらう。一つは外面的な統一性であり、いま一つは内面的なそれである。<sup>(四)</sup>

形式の統一性とは、形式が内容を一つの全體につなぎ合せる作用に他ならない。既に指摘されたやうに、孤獨者が本来その行為に於て他と共に在り、他とながつて在るものとすれば、行為する孤獨者は、たゞへ彼が隠遁者と呼ばれる者であらうとも、常に必ず何等かの多數の孤獨者の一定の行為の形式の下に立たなくてはならない。所謂隠遁者の隠遁といふ行為ですら、多に於ける一の行為であつて、若しも彼が何等かの多數の孤獨者の行為の形式の下に立たなかつたならば、在り得るものではないであらう。行為する孤獨者は、何等かの行為の形式の下に在つて、初めて他とつながりながら、それぞれに獨自の異質的な行為を實現することが出来るのである。従つて多數の孤獨者の行為の形式そのものは、彼等の現實的な行為に對して、先づそれらの行為の圈若しくは枠としては存在するのである。行為の圈としての行為の形式は、行為の内容を規定するものではなくして、行為の主體即ち行為する孤獨者の在り方を規定するものである。本来、現實的な行為の形式は、行為の内容を離れて在るものではない。然るに現實的な行為も亦、

行為の主體から離れて在るものではない。行為の形式は、先づその實存の根據を、行為する孤獨者の在り方に對する規定の裡に持つことなくしては、彼等の行為の内容を現實的に規定することは出來ない。行為の形式は、行為の圈に於て、行為する孤獨者の行為ではなく、その在り方を一つの全體につなぎ合せるのである。これが私の所謂行為の形式の外画的な統一性に他ならない。斯かる外画的な統一性的形づくる一つの全體は、行為の形式の構造である。行為の形式は「その肢體がわれわれ自身であると云ふ構造」<sup>(Hab.)</sup>を持つのである。而かもその構造は、われわれ自身即ち行為する孤獨者自身に由つて形づくられるのではなく、支持されるのであって、その關係は、國家が一人一人の國民に由つて形づくられるのではなく、支持されるのと同一である。そして行為の形式は、自らの形づくるその構造を通じて、初めて行為する孤獨者の行為そのものを一つの全體につなぎ合せるところの、その内面的な統一性を展開することが出来るのである。従つて行為の形式の構造は、その内面的な統一性にとつては、實現の場であると云へよう。併し行為の形式の構造即ち行為の圈は、決して單にその實現の場で在るに止まるものではない。何故なれば行為の圈に在つて、行為する孤獨者は、單にその在り方を一つの全體につなぎ合されてゐるだけであつて、その行為の内容をも直ちに一つの全體につなぎ合されてゐるのではないからである。固より彼等が行為の圈に在ることは、彼等の行為の内容が一つの全體につなぎ合される機會ではある。併しその機會は、常に彼等がその行為に於て彼等自身を實現せんとする機會と並び存するのであって、行為の圈に在るとき、彼等は常にこの二つの機會の緊張の中に立つのである。若しきさうでなかつたならば、一つの行為の圈に在つて、彼等がそれぞれに獨自の異質的な行為を展開することは、不可能

でなくてはならない。行爲の圈に於ける彼等の異質的な行爲は、固よりそこに自分自身を實現せんとする機會のみに由つて成立するが故に、異質的のではない。その機會と並んで、彼等の行爲の内容を一つの全體につなぎ合せんとする機會が在り、この二つの機會が一つながら彼等自身の行爲の裡に解放されてゐるが故に、彼等の行爲は、獨自な異質性を帶びるのである。従つて斯かる行爲を包括する行爲の圈は、行爲の形式の内面的な統一性の實現の場であると共に、また行爲の主體の人格の實現の場であると見做されなくてはならない。行爲の形式の内面的な統一性は、その現実の場に於て、行爲の主體の人格の實現と重なり合ふのである。即ち行爲の圈に於ては、孤獨者の行爲そのものを一つの全體につなぎ合せる行爲の形式の内面的な統一性が、孤獨者自身の自己實現の作用と重なり合つて、そこには多數の孤獨者のそれぞれに異質的な多様な行爲を現出せしめてゐるのである。従つて一定の行爲の圈に於て初めて可能となる孤獨者の現實的な行爲に於ては、行爲の形式の内面的な統一性が、孤獨者自身の自己實現の作用に由つて、或は促進され、或は停止され、更に或は阻止されると共に、孤獨者自身の自己實現の作用も亦、行爲の形式の内面的な統一性に由つて、或は促進され、或は停止され、更に或は阻止されると共に、而して行爲の形式の内面的な統一性は、その現実の場に於て、斯くの如く孤獨者自身の自己實現の作用と交叉することに由つて、絶えずその形づくる一つの全體を生成の状態に置くのであり、孤獨者自身の自己實現の作用も亦、その交叉を通じて、絶えずそれが基く人格を活動の状態に在らしめるのである。従つて常に生成の状態に在る行爲の形式そのものは、行爲する孤獨者の人格の活動を離れて在るものではなく、その活動を外面向的に内面的に規定しながら、またその活動に由つて外面向的に

も内面的にも支持され生成されてゐる。斯くの如き現實的な行爲の形式が、「行爲の内容を決定する多」であり、斯かる多の下に、行爲する孤獨者即ち個別者としての人間が、自己を實現する時に、そこには多様な異質的の行爲が現出すると共に、また必然的に多様な異質的の行爲關聯即ち社會過程が現出するのである。社會過程は、一派の學者が考へるやうに、個別者としての人間が單に彼等自身のみで *zwischenmenschlich* に展開するものではない。若しもさうであるとしたならば、現實的な形式は、單なる社會過程の結果若しくは硬化に過ぎないものとなるであらう。斯かる見地に立つウイゼが「社會とは、人々がそれに徹底しようとすれば、その意味が消失するところの名稱である」といふワクスウェラアの言葉に同感の意を表してゐることは、興味深き事實である。<sup>(七)</sup> 意味なき名稱は、本來名稱ですらない得ない筈である。社會過程を開ける個別者の多様な異質的の行爲は、決してそれ自身に於て現出するものではなく、他との關聯に於て現出して、それ自身また他との關聯を實現するものである。従つてそれが他との關聯を實現する根據は、それ自身に在るのではなく、他との關聯に於て在るそれ自身に在るのである。この他との關聯に於て在るそれ自身を、單なるそれ自身と見誤るならば、本來の社會即ち現實的な行爲の形式は、既に斯かる見解の出發點に於て、消失するの他はない。従つてそれに徹底しようにも、既に消失し去つたものを、如何に追ひ求めて、所謂意味なき名稱以外に到達し得ないことは當然でなくてはならない。單なる社會過程若しくは硬化としての現實的な行爲の形式は、正に斯くして到達された意味なき名稱以外の何ものでもない。われわれの直接的な社會體驗に殺到する社會過程は、いづれも現實的な行爲の形式の下に在る個別者間の行爲關聯である。斯かる本質的な構造に於て在るが故

に、われわれは社會過程そのものの裡に、現實的な行爲の形式の諸性質を探求することも出來れば、また個別者自身の諸性質をも具體的に追求することが出來るのである。現實的な行爲の形式は、決して社會過程の結果ではなく、却つてそれらを一つの全體に包むものであると同時に、また個別者の自己實現の作用と共に、それらを一つの全體に由つて貫くものである。

右の如き現實的な行爲の形式こそ、疑ひもなく一つの全體としての社會即ち社會集團であらう。社會集團は、個別者の在り方を一つの全體としての行爲の圈につなぎ合せるものであると共に、またそこに在る個別者の行爲を、一つの全體としての集團精神に由つてつなぎ合せるものである。併し個別者は、社會集團が外面的に展開する行爲の圈に在つて、初めて他とつながりながら、行爲するのであるが、その行爲に於ては、決して單なる社會集團の成員で在るに止まるものではない。何故なれば、彼等は、その行爲に於て、彼等の在る社會集團の内面的な統一性の規定を受けると共に、常にまた彼等自身の自己實現の作用をその行爲の裡に展開して、社會集團の内面的な統一性を絶えず促進し停止し阻止しながら、集團精神を不斷の生成の狀態に置くからである。従つて彼等は、常に社會集團に在つて、その成員であると共に、自分自身即ち個別者なのである。個別者としての人間は、決して一つの社會集團にその存在も行為も吸收され盡されるものではない。彼の存在と行為の上には、多くの社會集團が交叉するのである。ジムエルは「個別者がそれらの下に立つ種々の圈の數は、文化の程度を示す尺度の一つである」といひ、また「人格は一定の社會的な圈に自己」を獻け、そこに自己を喪失して、然る後に自己に於ける社會的諸圈の個別的な交叉に由つて、再び自

「己の特質を恢復する」とも云つてゐる。個別者としての人間は、種々の社會集團の交叉の下に立つて、一面に於ては、斯くの如くそれ自身を實現すると共に、他面に於ては、その自己實現を通じて、それぞれの社會集團を現實的に支持し、生成せしめてゐるのである。従つて彼等は單なる社會集團の成員で在るに止まるものではないが、社會集團の成員で在ることに由つて、自己を實現する個別者であり、また自己を實現する個別者で在ることに由つて眞の社會集團の成員となるものであると云へよう。眞の社會集團の成員とは、その單なる成員が社會集團に在つて、そこに「自己を獻げ自己を喪失する」ものであるのに對して、同じく社會集團に在りながらも「自己の特質」に由つて社會集團そのものを生成しゆくものである。社會集團に於て、その眞の成員はすべて同時にその單なる成員で在ることが出来るが、その單なる成員は必しもすべてその眞の成員となることは出來ない。従つて社會集團に於ては、その單なる成員が「全體」として現れるのに對して、その眞の成員は常に「特殊」若しくは「若干」として現れるのである。

斯くてこの章の冒頭に掲げておいた——全體的な社會秩序と特殊的な社會秩序との構造に關する——疑問は、次のように解決され得るであらう。

全體的な社會秩序と特殊的な社會秩序とに於ては、一見するといふにも「一つの全體としての社會も個別者としての人間も、共に一方に於ては秩序の主體であると同時に、他方に於ては秩序の實現の場となつてゐる。」(三二頁)併しこよりそれらは、いづれも全く同一のものとして、一方の秩序の主體であると共に他方の秩序の實現の場となつてゐ

るのではない。先づ一つの全體としての社會に就てみると、全體的な社會秩序の主體であるそれは、社會集團の内面的な統一性の基體となつてゐる一つの全體即ち集團精神であるのに對して、特殊的な社會秩序の實現の場となつてゐるそれは、社會集團の外面向的で統一性の下に在る一つの全體即ち社會集團の成員に由つて支持されてゐる行為の團である。同様に個別者としての人間に於ても亦、全體的な社會秩序の實現の場となつてゐる凡ゆる個別者としての人間と、特殊的な社會秩序の主體である若干の個別者としての人間とでは、決して同一のものではない。前者が行為の團に一つの全體として在るところの、社會集團の單なる成員としての個別者であるのに對して、後者は行為の團に特殊として在るところの、社會集團の眞の成員としての個別者である。従つて二つの社會秩序の構造を、これらの規定に従つて、書き改めれば、次のやうになるであらう。

(一) 全體的な社會秩序は、社會集團の集團精神がその單なる成員としての個別者の間に實現する意味的な關係であり、

(二) 特殊的な社會秩序は、社會集團の眞の成員としての個別者が、社會集團の行為の團に實現する意味的な關係である。

然らばこれらの意味的な關係に現れる意味は、それぞれに如何なる内容を持ち、また相互に如何なる關係に立つのであらうか。この問ひと共に、われわれは社會秩序の論理の中心へと立ち入る。何故なれば意味的な關係に於ける意味は、關係の基本であるからである。われわれは、社會秩序の構造に就て、その一つの本質的な契機、即ち社會集團

と個別者との社會秩序に於ける存在關係を知つた。次には、それらのものの意味及び意味關係を検討して、それらが社會秩序を如何に動かしてゐるかを確めなくてはならない。

## II

社會集團は、個別者をその存在と行為とに於て一つの全體につなぎ合せるものであつた。その統一性を——外的、内面的の二づれを問はず——現實的に働らかしめるものは、社會集團の意味である。

然るに社會集團は、多くの學者に由つて、用語並に解釋の上に多少の相異こそあれ、その意味に従つて凡そ次の三つの主要類型に大別されてゐる。(一)血族集團 (二)地域集團 (三)活動集團。即ち第一のものは、血の共同を意味として持つ社會集團であり、その外面向的統一性の形づくる行為の圈は、例へば民族や家族である。人々が民族や家族の單なる成員として在るとき、彼等の行為を等しく貫くものは、血の共同の精神であらう。同様に第二のものは、土地の共同を意味として持つ社會集團であり、その外面向的統一性の形づくる行為の圈は、例へば村落や都市である。一般に村民や市民の行為をつなぎ合せてゐるものは、土地の共同の精神である。これらに對して、第三のものは、固より活動の共同を意味として持つ社會集團であるが、活動の共同は現實的には職業の共同と労働の共同とに分化されて在るものであるから、その外面向的統一性の形づくる行為の圈も亦、職業の共同を契機とするもの(同業者の交際圈)と労働の共同を契機とするもの(同僚の交際圈)とに別かたれるのである。これらの行為の圈に在るもののが

は、仲間の精神に由つてつなぎ合されるのである。

(註) 右の集團類型の三區分は、直接にはルネ・モーニエの提唱に従つたのであるが、彼が活動集團の例として同業組合や労働組合を擧げてゐるのは、私のとらざるところである。これらの組織體は、活動集團の上に現れるものであつて、決して活動集團と同一のものではない。すべて社會的な組織體は、社會集團の行為の圓に在る若干のその眞の成員に由つて作り出されるものであつて、そこに全體として在るその單なる成員に由つて形づくられるものではない。同業組合は、「同業者の交際圓」が在つて、その上に初めて若干の有能な同業者に由つて作り出されるものであらう。同様に労働組合も亦、その根底は「同僚の交際圓」に在り、その作り手は若干の有爲な同僚に在るのである。<sup>(10)</sup>

併し社會集團の主要類型は、果してこの三つのものに盡きるであらうか。 · ·

人間は、人間の中に生まれ、住み、働く。血と土地と活動との共同なきところに、人間の生活はない。血族集團と地域集團と活動集團と——これらの集團の持つ意味は、いづれも人間の生活にとつて必然的な契機に根ざしてゐる。従つて如何なる人間も、彼の生活に於て、常に同時にこれら三つの集團の成員なのである。併しこれら三つの集團は、斯くの如く凡ゆる人間の上に交叉してゐるばかりではない。それら自身が、また相互に深く交叉してゐるのである。例へば家族は、決してそれ自身で存在するものではなく、村落か都市に在つて、また何等かの活動圓に關與して、初めてそれ自身の存在を確保するのであらう。この關係は、村落や都市に於ても、また同業者や同僚の交際圓に於ても全く同一である。斯くの如き集團そのものの交叉は、如何なる根據に基いて、且つ如何なる場所に於て可能なのであらうか。若しもそれらの集團が、それぞれにそれ自身で存在し得るものであつたならば、それら相互の交叉は、單に

それぞれの集團の作用が形づくる關係に過ぎないものであらう。併しそれ自身に於て存在せず、他との交叉に於てそれ自身の存在を確保する集團相互の交叉に於ては、その交叉に於ては、その交叉そのものが、既にそれぞれの集團の存在の本質に屬するのであって、それは決して單なる集團の作用から派生するものではないのである。従つて斯くの如き集團相互の交叉を可能ならしめる根據も亦、それぞれの集團の單なる作用の裡にではなく、その存在を可能ならしめてゐる意味の裡に求められなくてはならない。然るにいま指摘したやうに、それらの集團の存在を可能ならしめてゐる意味は、いづれも等しく人間の生活にとつて必然的な契機に根ざしてゐるが、それらの契機は、人間の生活を可能ならしめるものであると同時に、人間の生活に於て共に在るものである。即ち血と土地と活動とは、またそれ自身に於ては存在せず、人間の生活の内に共に在つて、人間の生活を可能ならしめてゐるのである。従つて斯くの如き生活の契機に根ざす集團の意味も亦、その存在に於ては、生活の共同といふ意味の下に共に在るのである。血の共同も土地の共同も、更には活動の共同も、これらはいづれも生活の共同の下に初めて存在し、そこに交叉して在るのであって、生活の共同なきところに、これらの共同の存在を認めるのは、大地や太陽を離れて植物の存在を考へるに等しい。従つて彼の存在と行為とを血の共同や土地の共同や活動の共同に由つて規定されてゐる人間は、また必然的に生活の共同に由つて彼の存在と行為とを規定されるのである。茲に生活の共同を意味として持つ第四の社會集團が指摘せられる。私はこれを「生活集團」若しくは「ボリス集團」と名附けて置く。生活集團の外面向的統一性の形づくる行為の圈は、例へば民族や國民であり、國民の一員としてのわれわれの行為をつなぎ合せてゐるものは、

生活の共同の精神である。血族集團や活動集團が、相互に交叉するのは、斯かる生活集團に於てであつて、例へばわれわれの血族や村落や職業は、日本國民といふ生活集團に包まれて在ると共に貫かれて居り、斯かるものとしてそれらは相互に深く交叉してゐるのである。

然るに生活集團も亦、血族集團や地域集團や活動集團の上に、それ自身で存在して、單に上からこれらの集團を包み貰くものではない。生活の共同は、血や土地や活動の共同を契機とする。即ちそれは、血や土地や活動の共同に由つて可能ならしめられるのである。従つて生活集團も、その成立の過程に於ては、血族集團や地域集團や活動集團の上に在るのではなくして、それらの中に在る。即ちそれぞれに他との交叉に於て在るこれらの集團は、それ自身の確保を通じて、いづれも必然的に生活集團へと進むのである。家族の一員としてのわれわれは、自分達の家族の存在に於て、それが在る村落やそれが關與する職業の存在に對して決して無關心であることは出來ない。それらの存在を確保することに由つて、それ自身の存在を確保し、またそれ自身の存在の確保を通じて、それらの存在を確保しようとする。同様の事實が、村落や同僚の交際圈に就ても亦認められ得ることは架説を要しない。これらの各集團に内在する斯かる循環的な努力への意圖を實現するものは、それぞれの集團の眞の成員である。而して彼等の實際の努力は、その中心を飽くまでもそれぞれの集團そのものの存在の確保に置くものではあるが、その中心に據つて描き出される彼等の努力の圓は、それぞれに他の集團に於ける同様の努力の圓と重なり合ふのである。即ち彼等の努力は、その動機を各々獨自なるものに持ちながら、その結果に於ては、常に必然的に連帶性を生み、この努力の連帶性の下に、そ

れぞれ自分自身の集團の存在を確保すると共に、またその確保を通じて愈々その努力の連帶性を深めるのである。而して斯かる努力の連帶性は、固よりそれらの集團が共に在ることに由つて成立するのであるが、それらの集團が共に在るといふことは、それらの集團が生活の共同の下に在ることに由つて成立するのである。然るにすべて人間生活に現れる現實的な意味は、事實に基いて發生して、その事實を人間的に發展せしめるものである。生活の共同といふ意味も亦、固よりその例外をなすものではない。即ちそれは、生活の共同といふ事實に基いて發生して、その事實を人間的に發展せしめるものであるが、その事實を意味に媒介するものは、いま述べた各集團の努力の連帶性である。即ちその努力の連帶性は、一面に於ては、生活の共同の下に在る各集團から發生して、それぞれの集團の存在を確保すると共に、他面に於ては、斯かる連帶性を可能ならしめた生活の共同といふ事實に對してその現實的な意味を形成するのである。従つて生活の共同といふ意味は、生活の共同といふ事實から、その下に在る各集團のそれぞの存在の確保への努力を通じて現出するのであるが、それが一たび現出すると、その努力の連帶性には、その意味を基準とした一定の行爲の形式が成立するのであり、これが生活集團に他ならない。

アリストテレスに從へば、「日常生活の爲に自然的に組織された共同體は家族であり」「單に日常生活的に行はまらない必要の爲の、數多の家族から成立する最初の共同體は村落である」のに對して「數多の村落から成立する最後の共同體はポリスであつて、それは今や謂はば全き自立自足の最終點に達したものであり、斯くて、ポリスは單なる生存の爲に發生したのであるが、良い生活の爲に現存するものなのである。」固より此處に、彼が家族と村落との生成を

前後の關係に置いてゐること及びボリスを形づくる共同體から活動集團を除外してゐることは、われわれの首肯し得ざるところであるが、彼がボリスを、それらの生存の爲の諸集團から發生した、自立自足の最終點に立つ、良い生活の爲に現存するものと認めてゐる點は、よくボリス即ち生活集團の本質を捉へ得た千古の卓見と稱さるべきであらう。いま、このアリストテレスの見方に従つて、血族集團と地域集團と活動集團とを一括して「生存集團」と呼べば、生活集團は、生存集團の中から出て、それらの上に立つものである。即ちそれは、生存集團の、存在の確保への努力から發生しながら、一たび成立すると、却つてそれらの努力を、單なる生存集團の存在の確保から引き離して、それらの努力の連帶性そのものの意味即ち生活の共同といふ意味に従つて規定するに到るのであり、生存集團の單なる存在の確保への努力は、斯かる規定を通じて、それぞれの存在の向上即ち「良い生活」への努力と成るのである。此處に文化の創造がはじまる。蓋し文化とは、その如何なるものも人間の「良い生活」への努力の客觀化されたものに他ならないからである。従つて文化は生活集團の下に於てのみ創造されるのであつて、生活集團は謂はば文化の母胎とも云ふべきものである。而して人間の歴史が、窮屈に於て文化の歴史として在るものとすれば、生活集團は、また眞の一の歴史の通路でもあらう。斯くの如き生活集團が自立自足の最終點に立つと云はれるのは、生存集團がそれぞれ存在の確保への努力の連帶性を持つことなくしては自立自足出来ないので對して、生活集團はそれ自身の意味を擴充することに由つて自立自足出来るからである。固より生活集團と雖も、それが地上の獨在的な存在ではなく、其處に他の生活集團と並んで存在するものである以上、交通がそれらの生活集團を相互に結びつけるやうになると、通商に、

戦争に、或は文化の交換に他と激しく交叉するに到る。併しこの交叉は、生活集團の單なる存在の確保の爲に求められたものではなく、その存在の擴充の爲に求められたものであり、従つて強力な生活集團を一方若しくは兩方の極として展開されるものである。それ故、そこには他から侵略され或は壓倒されて、自立自足の出來なくなる生活集團の生ずることはある。併し斯かる生活集團は、それが自立自足出來なくなつたときに、既にそれ自身獨自の生活集團で在ることを止めてゐるのであり、本質的には單なる血族集團や地域集團や活動集團に還元されて、他の生活集團の下にはいつてゐるのである。従つて他との交叉に於ても自給自足し得る生活集團のみが、眞の生活集團であり、「自立自足の最終點」は常に生活集團の本質に屬してゐるのである。

(註) 血族集團と地域集團との生成に於ける關係に就ては、アリストテレスのやうに血族集團を前と解するものもあれば、逆にムツケのやうに地域集團を前と認めるものもある。彼等の主張の内容には、それぞれに傾聽すべきものの在ることは勿論であるが、その結論はいつも不當である。人間は、彼等の兩親の間に、且つ一定の土地に生れるのである。彼等の兩親が如何なる婚姻形式の下に在らうとも、兩親のない人間はなく、また彼等が如何なる放浪の生活に身を置かうとも、地上に人間の無制限な放浪はなく且つ郷土のない人間はない。この單純な事實は、如何なる論證にもまして、血族集團と地域集團との同時的 existence を直截に指示するものであらう。最も原始的なホルドと雖も單なる血族集團でもなければ、また單なる地域集團でもない。それは血族集團であると共に地域集團なのである。而かもそのホルドに、既に性別分業と年齢別分業とは現れてゐた。そこに同僚の交際團が交錯してゐたことは疑ふべくもない。人間は一定の土地に勤らく兩親となるのである。血族集團と地域集團と活動集團と——これらの集團は人間の生存そのものの

契機に根ざして同時に存在し、それらの同時的存在に於て、そのいづれの一つをも缺くことの出来ないものである。

然るに生活集團に於て、各生存集團の眞の成員が實踐するそれぞれの集團の存在の確保への努力が、その存在の向上への努力に轉化すると、彼等は生活集團の成員となつて、各生存集團の作用を良き生活の共同の爲に規定するに到る。即ち彼等は斯かる作用の規定に由つてその存在を引上げようとするのである。従つて生活集團は、生存集團の中から出て、それらの上に立つばかりではない。それらの上に立つて、それ自身の意味の擴充を計ると共に、またそれらを包んで貫くのである。固より生活集團も亦、それが獨自の集團である限り、その外面向的並に内面向的な統一性は、直接には個別者に向けられて、それ自身その眞の成員と單なる成員とを持つのであるが、いま述べたやうに、生活集團は、それらの成員を通じて、その外面向的な統一性に由つては、各生存集團の良き行爲の圈を形づくると共に、それらの集團の作用を生活の共同の精神に由つてつなぎ合せるのである。即ちボリスは、その構造に於て一々の國民を持つばかりではなくして、彼等の家族、彼等の村落と都市及び彼等の職業を包んでゐるのであり、またその作用に於ては、一々の國民と共に彼等の家族、彼等の村落と都市及び職業をも貫いてゐるのである。

然るに斯く生存集團を包み貫く生活集團の意味は、本來生活の共同といふ事實から、各集團のそれぞれの存在の確保への努力の連帶性に由つて媒介され來たつたものであつた。従つてその媒介を通じて各集團の努力の連帶性そのものの時々に持つ特質がそこに反映するのである。即ち各集團の努力は、その連帶性に於て、決して常に平均して在るものではない。その連帶性は、常にいづれか一つの集團の努力を軸心として構成されてゐるのである。従つてその連

帶性は、時々に血族的か地域的か活動的な特質を帯びるのであり、これが夫の媒介を通じて、生活集團の現實的な意味に反映するのである。

マックス・ショーラーは、歴史の経過に次のやうな三つの階相の次序を認めてゐる――

(一)第一の階相は、凡ゆる種類の血縁關係並にそれを合理的に規制する諸制度（父權、母權、婚姻形式（族外婚と族内婚）、性的結社、世襲種族の混合と分離並にこれらに法律的に習慣的に加へられた「諸々の制限」）が、歴史の経過の獨自なる可變者と成り、また集團の形成形式を根本的に規定する階相であり、即ちそれらが現實に於ける他の諸原因（例へば政治的原因や經濟的原因）から生起するものに對して、その舞臺を決定する階相である。

(二)第二の階相は、斯くの如き作用の優位 (Wirkprimat) (い)の言葉は、舞臺を定立すると云ふ局限された意味に解されなくてはならない)が、政治的權力要因、就中國家の作用力に在る階相である。

(三)第三の階相は、經濟に作用の優位が在る階相であり、經濟的な諸要因が現實の経過を規定すると共に、精神の歴史に對しても亦「水門開放」(schleussenöffend) 「水門閉鎖」(schleussenschliessend) の役目を演ずる階相である。

ショーラー自身は、右の見解に由つて、從來の歴史論に於ける三主要方向〔種族主義（グムブウキチ、ゴビノー）と政治主義（ランケ學派と新ランケ學派）と經濟主義（カール・マルクス）〕を、それぞれにそれ自身としては存在し得ず、歴史的に相關聯せるものとして統一したのであるが、この見解は、若干の訂正を加へれば、また移して生活

集團の意味に反映する各生存集團の努力の連帶性の現實的な特質の上にも適用され得るものであらう。

(註) 此處に加へるべき訂正は、主として第二の階相に就いてである。ひとり地域集團のみに止らず、すべて生存集團には、自治的權力が内在する。蓋し人間は何處に在つても「政治的な動物」(アリストテレス)であるからである。彼等に於ては、何事も自治的權力なくしては、統一的に實現せられるものではない。然るに他の生存集團がそれぞれに他と重なり合つて在るのに對して、地域集團は他を含んで在るものである。それだけに地域集團の自治的權力は、その内外の統一性にとつて、他のものよりも一層現實的であることが要請される。この意味に於て地域集團が政治的權力集團の特徴を帶びるものと見做されるのは、當然である。併し地域集團の自治的權力が、地域集團そのものに止まつてゐる限りは、未だ決して國家の作用力と同一のものではない。それが各集團の努力の連帶性の軸心となつて生活の共同の現實的な意味を形成するとき、その意味に由つて可能ならしめられる生活集團に於て、それは初めて國家の作用力となるのである。併しこの關係は、他の生存集團の自治的權力に於ても同一である。國家とは、生活集團の組織體であり、その作用力は、時々の生活集團の意味を形づくる生存集團の自治的權力の、生活集團を通じての擴大に他ならない。政治的權力要因を地域集團に認めるることは、その現實的な特徵に由つて正しい。併しこれを直ちに、國家の作用力と同一視することは、避けられなくてはならないのである。第三の階相に就ては、經濟の「作用の優位」が、現實的には活動集團に由つて實現されるものであることを附け加へて置けば、充分であらう。

斯くて各生存集團の、存在の確保への努力の連帶性が、血族集團の努力を軸心として構成されるときは、そこに血族的な生活集團が現出するのであり、地域的な生活集團と活動的な生活集團とは、それぞれに各生存集團の努力の連帶性の軸心を地域集團の努力または活動集團の努力に置くのである。生活集團は、常に斯くの如きものとして、その

現實的な意味の擴充を追つて自立自足するのである。

それに對して、各生存集團の成員は、それぞれの集團の存在の下に在ると共に、各生存集團の連帶性を通じて、一つの生活集團の下に在るのである。彼等がこれらの集團の下に單に在るとき、彼等の行爲は、外面向的にも内面向的にもその屬する集團の規定を受けるのであるが、これらの規定を通じて先づ自己の生存集團の存在の確保に積極的に乗り出すとき、彼等はその集團の眞の成員となると共に、またその努力が必然的に形づくる努力の連帶性に於て彼等の努力がその軸心となるときは、同時に生活集團の眞の成員ともなるのである。生存集團の眞の成員であるとき、彼等の努力の中心は、専らそれぞの生存集團の存在の確保に在るのであるが、一たび彼等が生活集團の眞の成員となるときは、彼等はそれぞれに自分達の出て來た生存集團の特質を帶びながらも、生活集團そのものの意味を外面向的に内面向的に擴充することに専心する彼等は、その意味の擴充に由つて直接的に凡ゆる生存集團の存在の向上を計ると共に、また文化をつくり、歴史をうむ。彼等はその意味の擴充への行爲に於て、眞に集團の成員で在ることに由つて自己を實現する個別者であり、また自己を實現する個別者で在ることに由つて眞の集團の成員なのである。

### 三

斯くてわれわれは社會秩序の意味内容及び關係に就て、次のやうな結論に到達することが出来る――

一般に一つの全體としての社會は、社會集團であるが、社會秩序の實現される一つの全體としての社會は、生活集

團である。何故なれば、社會秩序は、それ自身外面向的にも内面向的に完結性を帶びるものであり。(若しも社會秩序に斯かる完結性がなかつたならば、それは本來何等の社會秩序でも在り得ないであらう) 従つてそれはそれ自身で存在する社會集團に於て實現されるからである。

然るに生活集團に於ける社會秩序とは、生活集團の意味に基いて現出する、その成員の在り方に對する全體的な調和關係に他ならない。即ち生活集團の外面向的な統一性がその成員を單に全體的に包括するのに對して、社會秩序は、そこに包括せられた成員の在り方を集團の意味に従つて全體的な調和關係に結びつけるものなのである。この意味に於て社會秩序は、生活集團の外面と内面とを結びつけるものとも云はれるであらう。生活集團の成員は、常に同時に各生存集團の成員である。彼等は生活集團の成員としては相互につながりながら、そこに各生存集團の成員としての特質を持ち込むのである。そればかりではない。また彼等自身は、常に如何なる集團の下に在らうとも、個別者であり、その成員で在ることに由つて、自己を實現しようとするものである。此處に於て生活集團の形づくる行為の圖には、一つにつながりながらも、種々の異質的な行為が交錯するのである。これらの行為を、成員自身の在り方を全體的な調和關係に置くことに由つて、摩擦や對立なく集團の意味の擴充へと導くものが、社會秩序である。

然るに生活集團の意味は、常に生成の過程に在る。即ちそれはそれ自身であると共に、常にいつぶられつつあるのである。それ自身として在る生活集團の意味は、既に傳統として、その眞の成員の努力からは離れたものであり、前に挙げたガイガナの言葉を以て云ひ現せば「過去から成長したものである」これに對して、斯かる傳統的な意味に即し

て而かもつとくられつつ在る生活集團の意味は、その眞の成員の意味の擴充への努力に由つて實現されつつ在るものであり、同じくガイガアの言葉を借りて云ふならば、「未來の爲の基準を打ち立てるもの」である。斯くの如き意味に従つて、成員の在り方を一つの全體的な調和關係に置くとき、その置き方に二様の區別の現ることは、固より當然でなくてはならない。即ち全體的な社會秩序は、生活集團の傳統的な意味に基く成員の在り方に對する全體的な調和關係の實現されたものであり、これに對して特殊的な社會秩序は、生活集團のつとられつつある意味に基くそれの實現されたものである。而して生活集團の傳統的な意味が、その下に在る凡ゆる成員を包んで在るのに反して、生活集團のつとられつつ在る意味は、その下に在る眞の成員が單なる成員を包んで在らしめようとするものである。従つてそれらが成員の調和的な在り方を規定するとき、前者が成員に對して習慣的または道徳的な拘束力を持つに過ぎないのに反して、後者は成員に對して政治的または法律的な拘束力を持たねばならない。即ち生活集團の眞の成員は、その意味の擴充への努力の實現の爲に、生活集團の組織體としての國家を構成するのであるが、特殊的な社會秩序は常にこの國家を通じて成員に課せられるのである。然るに成員の在り方そのものにとつて、習慣的道徳的な拘束力は、深き内面性を持ちながらも強き決定力は持たない。これに對して政治的法律的な拘束力は、強き決定力を持ちながらも深き内面性を持たないのである。全體的な社會秩序は、特殊的な社會秩序の内に取り入れられることに由つてその強き決定力を持つと共に、特殊的な社會秩序は、全體的な社會秩序を取り入れることに由つてその深き内面性を持つのである。併し兩者は決して一つに重なり合ふものではない。全體的な社會秩序は、そこに重なり合つて來る特殊的な

社會秩序が、常に全體的な社會秩序の擴充へと敵へるゝやうに、特殊な社會秩序が、常に全國なるものに保たれてゐる。社會秩序は社會秩序、社會秩序は社會秩序の状態へと敵へるゝやうに保たれてゐる。

- (1) Theodor Geiger, *Die Gestalten der Gesellschaft*, Leipzig, 1928, s. 30.
- (11) a. a. O., s. 33.
- (111) Hans Freyer, *Einleitung in die Soziologie*, Leipzig, 1931, s. 8.
- (1111) vgl. Alfred Vierkandt, *Gesellschaftslehre*, Zweite Auflage, Stuttgart, 1928, s. 338.
- (H) Hans Freyer, a. a. O., s. 7.
- (K) vgl. Leopold von Wiese, *Allgemeine Soziologie*, Teil 1, *Beziehungslehre*, München und Leipzig, 1924, I. Kapitel: Allgemeine Grundzüge der Beziehungslehre. Verhältnis von Beziehung und Gebilde.
- (P) a. a. O., s. 21—22.
- (K) Georg Simmel, *Soziologie*, Leipzig, 1908, s. 411, u. s. 413.
- (K) vgl. Ferdinand Tönnies, *Gemeinschaft und Gesellschaft*, 8. Aufl., Stuttgart, 1935, s. 14 ff.
- " " Georg Simmel, a. a. O., s. 411 ff.
- " " Alfred Vierkandt, a. a. O., s. 442 ff.
- (10) René Maunier, *Essais sur les groupements sociaux*, Paris, 1929, p. 12.
- (11) Aristoteles, *Politik*, übersetzt von Eugen Rolfs, 3. Aufl. 1922, Phil. Bibl. Bd. 7. s. 2—3.
- (111) vgl. Mucke, *Horde und Familie in ihrer urgeschichtlichen Entwicklung*.
- (1111) Max Scheler, *Probleme einer Soziologie des Wissens*, im Versuche zu einer *Soziologie des Wissens*, herausgegeben von Max Scheler, 1924, s. 31—s. 32.